

# Newsletter

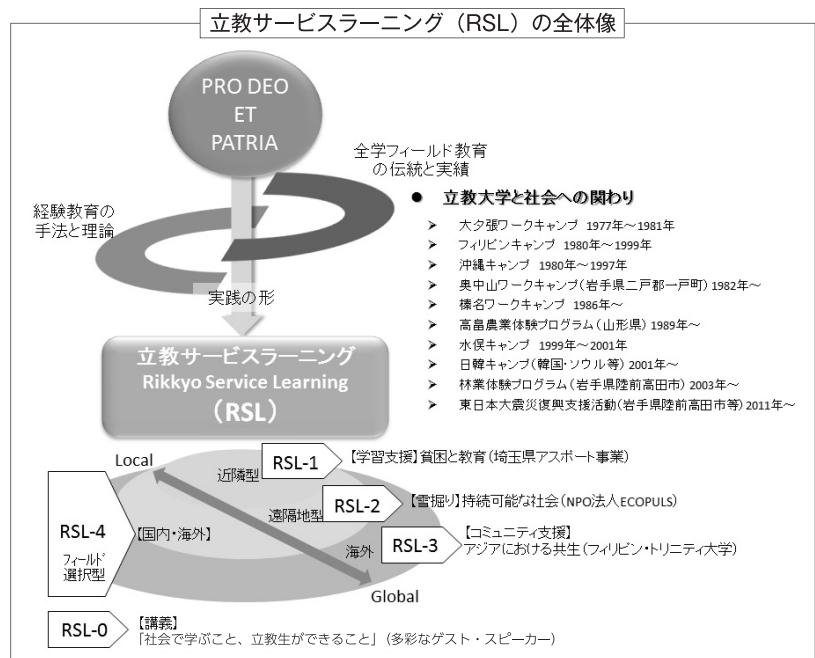


## 立教サービスラーニング科目 (RSL) 開講しました

立教大学と全カリの理念を実践するRSLにご期待ください 副総長・文学部教授 西原 廉太

立教サービスラーニング(RSL)は、本学の建学の精神であるPRO DEO ET PATRIAにもとづいて、正課外教育(フィールドエデュケーション)の伝統と先端の経験教育の理論と実践的知見を融合した、全人教育および専門教育を深める実践的教育手法です。立教大学では、2006年度の「国際化戦略答申」でサービスラーニングの有用性が取り上げられて以降、着実に検討を重ね、吉岡総長のもと2012年度に「社会連携教育検討WG」、続く2013年度には「社会連携教育実施検討WG」が設置され、私が座長として取りまとめを担当いたしました。そして本年度、正課の先行実施科目として「RSL-0」\*(講義型)、「RSL-1」(近隣型)、「RSL-2」(遠隔地型)を、正課外の先行実施プログラムとして「RSL-3」(海外型)を試行的に開講しました。履修学生の参加意識は高く、当初の期待通り社会の現場をフィールドとする新たな学習スタイルを拓く特長的な内容として受け止められています。2016年度には「RSL-3」の正課導入、学生自らフィールドを選択する「RSL-4」の新規開講をめざし、「Think Globally, Act Locally」な科目設定を通じて本格的にRSLを展開します。↗

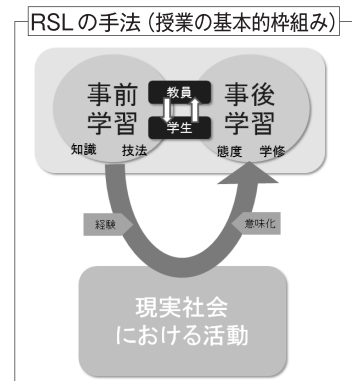
↘ 今後は、スーパーグローバル大学(SGU)構想における海外フィールドの開発や学士課程統合カリキュラムにおける学修充実に貢献することが使命と認識しています。これからのRSLの展開に皆様のご支援、ご協力をいただきますよう、お願い申し上げます。



\*2014・2015年度は主題別B「社会で学ぶこと、立教生ができること」として開講。

### ● RSLの理論的背景と手法としての特長

サービスラーニング(SL)の手法はアメリカで発祥しました。経験学習理論で著名なコルブ(Kolb, David)のモデルなどをもとにしながら、スタンフォード大学やミシガン州立大学、ミネソタ大学などで、独自の手法が開発されてきました。しかし、大きな枠組みで共通するのは、事前学習→社会的活動経験→事後学習(リフレクション)の3ステップを経ることで、学生が主体的に社会参加するために必要な視点・態度の形成や大学での専門学習への関心喚起につなげようとする点です。学生の活動を教職員がファシリテートしつつ、協働の学びを行うところに、正課として取り組むサービスラーニングの意義があるとされています。SLは国内でも導入が進んでいますが、RSLでは自己・他者理解力の向上や広義の政治参加意識の醸成、立教大学で学ぶことへの関心喚起など、本学理念に沿った独自の視点で手法開発を進めていきます。



### 目次

立教サービスラーニング科目 (RSL) 開講しました	西原廉太 (1)
RSL 科目の紹介	原田晃樹／逸見敏郎／他 (2)
複数の言語を学ぶ意義	羽鎌田直人 (5)
言語の各種検定試験を活用しよう	(6)
2014年度全学共通カリキュラム運営センターの主な活動	(7)
全カリ刊行物のバックナンバーについて	(8)

## □立教サービ斯拉ーニング開講科目の紹介□

### ■「社会で学ぶこと、立教生ができること」(RSL-O)に相当：主題別B／講義系SL科目 科目担当者による紹介～「社会の扉を開くきっかけに」

コミュニティ福祉学部教授 原田 晃樹

本講義は、前半に各分野で活躍する学生の活動報告を通じてその体験を共有し、教員による中間まとめを経て、後半には外部のゲスト・スピーカーをお招きして、各現場の実情・課題の講義とディスカッションを行った。

本講義を通じて私自身意外に感じたことは、受講生の多くは、教員側が「当然感じてもらえるだろう」と考えていた社会問題への怒りや共感といった意識が必ずしも高くないということだった。あるいは、そうしたことにピンと来ないと言う方が正しいのかもしれない。これは、受講生の多くが1年生であったためとも考えられるが、同時に、彼らに対して実施した意識調査やディスカッションから、彼らの現状肯定感の高さと関係していることもわかった。彼らは、総じて友人の数は多く、自己肯定感も高い。また、大学・学部に対する満足度も高い。こうした点自体は望ましいことであるが、他方で、そのことは、日常生活を通じて、価値観を共有できる仲間とのつながりを重視し、物の見方や判断基準を身近で同質的なコミュニティのそれに依拠していることの裏返しでもあるように見える。

自分とは異質な他者と交わる機会が少ないほど、自分の視野の外にあることへの問題意識は低くなり、狭い常識と経験で物事を決めつけてしまいがちである。おそらく、受講生にとっての最大の発見は、各分野で活躍している学生やゲストが、決して当初から明確な問題意識を持って活動に取り組んでいたわけではなかったということではないだろうか。自分が見聞きしたことがない物に対する好奇心と、それに自ら関わろうとするほんの少しの積極性が、結果として自分の殻を破るきっかけになったのである。

この講義を通じて、社会のさまざまな問題や困難な状況にある他者に共感できる感受性と、それに対して少しでも具体的な行動に移せる勇気を持つきっかけを得てもらえれば、望外の喜びである。



#### 履修学生の感想(授業内リアクションペーパーより)

##### ◆「社会に一步踏み出すこと」とは、「テーマを見つけて行動すること」。(コミュニティ福祉学部4年・男子)

これまで、自分から一步踏み出す勇気というものがとても重要であると考えていたが、いざやってみようとするとなかなかうまくいかない場面があった。でも、この授業で良い答えを見つけた気がした。「他人事を自分事に変えていく」ということについてとても感心した。考えてみると、私的な問題については取り組みやすいというごく当たり前のことを意識できずにいた。多くの人との関わりの中で自分のテーマを見つけて行動することの意義を実感できた。

##### ◆学びの手法としてのサービ斯拉ーニングの魅力を知った。(コミュニティ福祉学部3年・女子)

「社会に出る」という言葉について、単に就職する、学生という立場から離れる、という程度でしか考えたことがなかったが、もっと広い意味があることに気づいた。社会に出るとは、社会との接点を作り、そこで得たことを自分の中に取り込んでいくことであると理解した。そのためには、自ら体験・経験を意味づけていくことが大切である。サービ斯拉ーニングでは、そのような体験や知識の振り返りを重ねていくことに大きな特徴があり、貴重な学びができると感じた。

##### ◆「自由の学府」で学ぶ意義を実感。(現代心理学部2年・女子)

この授業は「自由の学府」の立教大学にいる自分について考える機会になった。一見無意味に思える出会いや悩みぬく経験を学生時代にどれだけストックできるか、と問いかげられたとき、そのことの重大さに気づいた。日常生活で自分に起こること、辛いことなど全て含めて自分の財産になると思うと、今まで以上に前向きに生きていけると思った。

#### 授業の構成

授業回	授業内容	担当他
1	オリエンテーション 授業のねらい、進め方、受講に際しての準備・立教のやってきたこと	原田晃樹教授
2	立教大学と社会のつながり① チャペル・キャンプ(日韓キャンプ)	金大原チャブレン
3	立教大学と社会のつながり② 新座キャンパスにおける学生の地域連携活動	新座学生団体(NOAA Art Project、センブラル) 所属学生
4	立教大学と社会のつながり③ 東日本大震災復興支援活動	コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援推進室、学生復興支援局 Three-S
5	キャンパスで学ぶこと・社会の中で学ぶこと(キャンパスと地域を往復する学びの事例)	原田晃樹教授
6	キャンパスで学ぶこと・社会の中で学ぶこと(方法論としてのサービ斯拉ーニング概説)	原田晃樹教授
7	社会の中に立つ大学生とは 社会参加する市民となるために	RSLパイロットプログラム運営室
8	社会に目をむける①-1 環境と開発、持続可能な社会創造	高野孝子氏(NPO法人ECOPLUS代表理事)
9	社会に目をむける①-2 環境と開発、持続可能な社会創造	高野孝子氏(NPO法人ECOPLUS代表理事)
10	社会に目をむける②-1 貧困と社会保障 生活保護世帯と教育格差;アスポート事業を例として	白鳥勲氏(アスポート教育支援統括責任者)
11	社会に目をむける②-2 貧困と社会保障 生活保護世帯と教育格差;アスポート事業を例として	龍前航一郎氏(埼玉県社会福祉課主査)
12	社会に目をむける③-1 社会に関わり、社会を創る;市民の立場から	鈴木英里氏(東海新報社記者、本学校友)
13	社会に目をむける③-2 社会に関わり、社会を創る;行政の立場から	久保田崇氏(陸前高田市副市長)
14	リフレクティブ・ディスカッション	原田晃樹教授、金大原チャブレン

■「RSL-1」(生活保護受給世帯の進学支援)：総合自由／実践系(近隣型)SL科目

科目担当者による紹介～「学生と教員との対話的リフレクション」

学校・社会教育講座教授 逸見 敏郎

「RSL-1」(自立と社会福祉：生活保護と埼玉県アスポート教育支援)は、授業期間中に活動をおこなうSL科目である。活動先の埼玉県アスポート教育支援事業は、貧困の連鎖を断ち切る施策として、高校受験を控える貧困家庭の中学生を対象とした学習支援を行っており、受講学生13名は学習指導ボランティアとして活動に参加した。

事前学習は、グループワークを通じた各自の参加動機の確認、田中聡一郎兼任講師(関東学院大学講師／社会保障政策論)による社会保障制度の概要とアスポート事業の目的および意義についての講義から構成された。これらを通して、活動に参加するマインドセットと対象となる中学生の生活状況についての基礎知識を得ることができたと言えよう。学習支援活動は、事後学習までの期間に8回の活動参加が求められた。学生は毎回、活動報告書をCHORUSから提出し、担当者は必要に応じてコメントを付した。

事後学習は、SLにおいて重要な学習機会である。学生自身が受講目的と事前学習をもとに、活動参加前の意識と実際に中学生に対する学習支援活動をおこなった体験とを統合するためには、学生同士の、またファシリテーターの役割を担う科目担当教員との対話的リフレクションが不可欠である。特に全カリ科目ならではの学年や学科を異にするハイブリッドな集団での対話では、担当者の想像を超えた学生の発見や思いが語られた。また自己覚醒的な気づきのみならず、学習支援活動を支援する人-支援される人といういわば垂直的構造への疑問や高校入学後の進路実現の可能性など、子どもの貧困対策の制度的側面への気づきも語られた。活動期間終了後も、ボランティアとして学習支援活動に参加する予定の学生が半数程いたことから、正課と正課外活動の連動も見られたといえよう。



履修学生の感想

◆経験そして学生・教員との協働を通じて、社会的課題への問題意識が見えてくる (文学部文学科2年 山本有華)

「中学生と触れ合えて楽しそう!」という気持ちから私はRSL-1を受講しました。学習教室はとても居心地が良く、その中で中学生たちと楽しく勉強したり学校や部活、好きなアイドルの話をしたりします。ある時「大学生は学校に行かないのでしょ?」という質問を中学生にされて、私の大学生活について説明した事もあります。

RSL-1を受講した事で自分自身の考え方はかなり変化しました。全く興味のなかった政治に対する意識も変わり、政府や各党が一人親世帯や生活保護世帯にどのような支援をしようとしているのかを自発的に学んだり、自分の持つ“1票”の大切さを認識したりしました。またグループのメンバーとは最終授業の発表のために何度も集まり、そのたびにアスポートの活動での自らの経験や活発な意見を共有し、とても有意義な時間を過ごす事ができました。

ボランティア活動を行うだけでなく、そこから各々が研鑽できることがRSL-1の魅力だと思います。

授業の構成

授業回	授業内容	担当他
1	オリエンテーション 授業のねらい・進め方、アスポートの説明と登録 (アスポート活動場所などの確認)	アスポート教育支援担当者2名
2	事前学習① 生活保護政策とアスポート事業 (1) 生活保護をめぐる問題と課題	田中聡一郎講師
3	事前学習② 生活保護政策とアスポート事業 (2) 埼玉県アスポート事業の政策的意義	田中聡一郎講師
4	事前学習③ 生活保護政策とアスポート事業 (3) アスポート事業と「教育支援」	田中聡一郎講師
5		
6	個別面談指導日*	アスポート教育支援活動への参加 (8回以上の活動に参加)
7	* 活動に関する質問相談を受け付ける。利用は任意。	
8		
9	個別面談指導日	
10		
11	個別面談指導日	
12	事後学習① アスポート教育支援活動参加のふりかえり	逸見敏郎教授、田中聡一郎講師
13	事後学習② 活動報告会準備 (グループ別ワーク)	逸見敏郎教授、田中聡一郎講師
14	事後学習③ 活動報告会 (グループ別発表) / 総括討論	逸見敏郎教授、田中聡一郎講師、アスポート教育支援担当者3名



## ■ 「RSL-2」(世界最深雪地での「雪掘り」と中山間地域交流)：総合自由／実践系(遠隔地型) S L 科目

「RSL-2」(雪掘りと農村交流を通して持続可能な社会を考える)は、秋学期集中科目として開講した。世界で最も積雪量が多い地域の一つである新潟県南魚沼市の山村集落にて、「雪掘り」とよばれる除雪作業を行いながら、現地に暮らす住民の方々との対話や交流を行う。担当は、西原廉太教授と高野孝子兼任講師(早稲田大学教授／NPO法人ECOPLUS代表理事)が担う。南魚沼で都市生活者と地元を繋ぐプログラムを年間通じて運営するNPO法人ECOPLUSが受入機関となって実施する。



事前学習で学生は、「雪掘り」の様々な背景や地域文化との関わりを理解しつつ、「なぜ、雪掘りを行政サービスで行わないのか」「日本の地域社会が直面する課題を先取りしているのではないか」「都会での生活には『暮らし』の実感が乏しい。中山間地域で大切にされてきた『暮らし方』というものに触れてみたい」といった関心を深めた。2月の体験学習では、現地が直面する課題や農村社会が持つ本来の豊かさを体感し、事前学習で学んだ知識や仮説と突き合わせた。

RSLが地方の課題をテーマとして取り上げる理由は、学生のコミットするローカルな課題が実はグローバルな課題と連結していることに、彼らが必然的に目を向ける機会となるからである。今回の「雪掘り」においても、地球温暖化・気候変動、人口減少社会と国土保全、エネルギー政策における都市と地方の機能分担など、論点は目白押しである。学生の自由な関心で学びを深めてもらえたらと願う。  
(文：RSLパイロットプログラム運営室)

## ■ 「RSL-3」(CUAC フィリピン・トリニティ大学)：正課外／実践系(海外型) S L 科目

海外でのサービ斯拉ーニングとして、正課外パイロット・プログラム「RSL フィリピン・プログラム」が、2月に実施された。このプログラムの最大の特徴は、立教大学もそのメンバーであるCUAC(世界聖公会大学連合)のアジア・ネットワークを最大限に活用した点である。受入機関のフィリピン・トリニティ大学(Trinity University of Asia)は、本学国際交流協定校である。1980年代から独自のSLを全学的に展開し、フィリピン国内では既に確固とした評価を確立しており、SLの模範となる大学である。今回は、韓国・聖公会大学、フィリピン・Easter College、日本からは本学の他に聖路加国際大学、プール学院大学、立教女学院短期大学が参加した。多様なバックグラウンドを持つ学生たちが、聖公会の理念の下、マニラ近郊の「バラングイ」とよばれるコミュニティでの支援活動や現地を拠点とするNGOに同行し、協働する経験を通じ市民的視座を形成した。

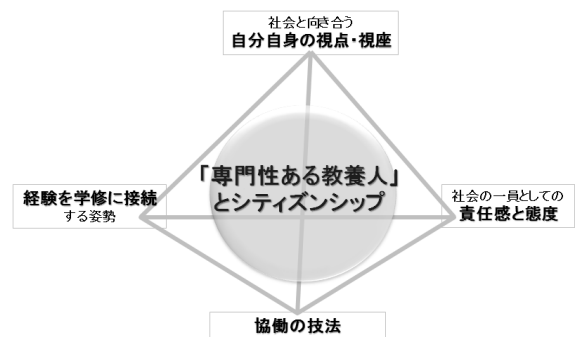
なお、本プログラムは、この結果を検証しながら、2016年度から正課科目として開講予定である。

(文：RSLパイロットプログラム運営室)

### □立教サービ斯拉ーニングが目指すもの□

～自分自身の社会的関心を掘り起こす力：シティズンシップ(Citizenship)の養成～

RSLが目指すのは、「専門性ある教養」を土台に、他者を理解し、協働できるグローバル・リーダーを養成するという、本学の学士課程教育の基本理念の具体的な実践です。これに向けてRSLでは、サービ斯拉ーニング(SL)の普遍的使命の一つであるシティズンシップの養成を追求します。RSLでは、グローバル化する世界において「シティズンシップ」とは、学生一人ひとりが現実社会と向き合う視点と視座を見つけ出し、個人の内発的な社会的関心に沿って、公共的な課題に向かって行動を起こす指針を描く力であると考えます。RSLでは特に、SLの手法を用いた「体験の意味化」を通して、以下の3つを実践します。



#### ①経験を学修に接続する姿勢の涵養

社会的活動で遭遇した公共的な課題から得た関心を、全カリや学部での科目履修計画やキャリア形成に結び付けることを促進します。

#### ②協働と行動の技法の養成

社会に対する自分の関心を発見する方法、行動を設計する方法、他者の共感や協力を得る方法、折衝・交渉の技法など、広義の社会参加に必要な具体的方法論について、講義型科目を中心に各科目で取り上げていきます。

#### ③社会の一員としての責任感の醸成

社会で生起する事象に対して、当事者意識を持つことの意義に対する理解を深めます。自分の社会的関心にもとづいて、「他人事」を「自分事」に転換する意識を身につけることで、社会人(シティズン)としての責任感覚を養います。また、今後のRSLの運営として、これまでの立教大学の伝統や大切にしてきた価値にもとづいて、全カリと学部教育の発展に貢献できるよう、自立性と公開性、開放性を両立した運営を実現できる組織体制づくりを進めていきます。

(文：西原 廉太)



【全カリ言語教育科目を履修して】

複数の言語を学ぶ意義

法学部政治学科4年次 羽鎌田 直人

私は、立教大学で第2言語としてフランス語、第3言語としてドイツ語を履修しました。フランス語は必修の言語Bとして履修し、さらに自由科目の履修を3年次まで続け、言語副専攻を修了し、ドイツ語は4年次に1年間自由科目として履修しました。

英語以外に学ぶ初めての外国語としてフランス語を選んだ理由の一つとして、この言語の持つ国際性を挙げることができます。確かに、現在では英語が世界共通言語としてその存在感を増していますが、フランス語は英語に次いで2番目に多くの国や地域で使用されている言語であると同時に、長い間外交用語として使用されてきた歴史があるため、国際連合や国際オリンピック委員会をはじめとする多くの国際機関の公用語として使用されています。このように世界的に重要視されている言語を学ぶことは、自分の将来の方向性を大きく広げるものだと思います。

私はスポーツクライミング競技の日本代表として活動しており、国際大会に参加する機会が多いのですが、大会の公用語は英語でも、大会役員とのコミュニケーションにおいてフランス語の重要性を感じる事がしばしばあります。スポーツ界においてフランス語の存在感は健在で、オリンピックでは必ずフランス語でのアナウンスが行われています。2020年には東京でオリンピックが開催されますが、その際にはフランス語の知識が役立つかもしれません。

ドイツ語を履修した理由は、スポーツクライミング競技のトレーニング理論が発達しているドイツ及びオーストリアに合宿や競技会で滞在することが多いからです。ドイツやオーストリアはかなり英語が通じる国ですが、やはり日常生活で困らない程度のドイツ語は身につけた方が生活しやすいと思い、一度は学んでおきたいと考えていたので、比較的時間に余裕がある4年次に履修しました。

このように第3言語まで学ぶ学生は、少数派でしょう。特に、近年グローバル言語としての英語の重要性が各方面で叫ばれている中で、英語以外の外国語を学ぶことの意味を見出すことはなかなか難しいことではないでしょうか。複数の外国語を学ぶよりも、英語をしっかりと極

めた方が効率的かもしれません。しかしながら、世界には何千といった言語が存在しているといわれている中で、英語だけでできれば良いのでしょうか。相手が非英語圏の人であれば、お互いに英語を完璧に理解し、自らの母語と同じように使用できたとしても、あまり心を通わせることはできないと思います。

例えば、私たち日本人が、外国からの観光客に片言の日本語で何か尋ねられた時の心情と、最初から英語で尋ねられた時の心情を考えてみましょう。そこには、ちょっとした「違い」があると思います。このことは、自分と相手の立場を入れ換えてみても成り立つことではないでしょうか。私たちが外国で現地の人に何か尋ねるときに、その国で使用されている言語を使うのと、英語を使うのとでは、やはり前者の方が相手に与える印象は良いと思います。もちろん、印象の良し悪しで対応が大きく変わるわけではありませんが、相手の言語を使うということは、相手に対する敬意を示すことにもつながり、それが何かしらのきっかけになり、思わぬ国際交流が生まれるかもしれません。このように、英語以外の言語を学ぶことは、その言語を使用する人々との距離を縮めることになると思います。

また、複数の言語を学ぶ面白さの一つとして、言語間の意外な共通点を見出すことも挙げられます。非常に興味深いことですが、それぞれの言語が使用されている場所や人々は異なるのに、単語の綴りが似ていたり、文法事項が似ていたりするということがしばしばあります。さらに、その理由を考えたり調べたりすることで、それらの言語についての深い知識を得ることにつながり、単にコミュニケーションのツールとしてだけではなく、その言語やそれを使用している国や地域の文化、歴史までも学ぶことができるのではないのでしょうか。複数の言語を学ぶことで得られるものは、決してそれぞれの言語そのものだけではないと思います。

このように、英語が非常に重要視されている中、英語も含めた複数の言語を習得することで、他とは一味違った人生を歩むことができるかもしれないと私は考えています。

【言語副専攻（言語B）カリキュラム】

	スキル科目	必修科目（4単位）		自由科目 言語副専攻（スキル科目12単位+関連科目4単位=16単位）			
		1年次		2～4年次			
		～語基礎1	～語基礎2	言語副専攻基礎科目（4単位）		言語副専攻コア科目（8単位）	
ドイツ語 フランス語 スペイン語 中国語 朝鮮語						～語中級1	～語中級2
						上級～語 ライティング1	上級～語 ライティング2
		～語スタンダード1	～語スタンダード3			上級～語リスニング・ リーディング1	上級～語リスニング・ リーディング2
		～語スタンダード2	～語スタンダード4			上級～語演習1	上級～語演習2
		～語海外言語文化研修（中級）		～語海外言語文化研修（上級）			
	関連科目	～語圏の文化、～語圏の社会、言語情報処理論（～語）、学部展開科目					

\*～語は、ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語とそれぞれ読み替える。

## 言語の各種検定試験を活用しよう

全学共通カリキュラムの言語教育では、多文化の共生を視野に入れた「異文化理解」を深めるとともに、異なる文化に属する様々な人々とコミュニケーションすることができる「言語運用能力」の修得をも目指しています。この理念から、本学では言語 A（英語）、言語 B（初習言語）の2つを必修としています。言語 A、B ともに1年生は必修科目を履修し、希望者は2年生以降に自由科目を履修できます。自由科目への接続や、自分の語学力診断用に、各種検定試験を活用してはどうでしょうか。

## 英語力伸長度測定テスト（TOEIC IP）の活用について

本学では、グローバル化の推進にあたり、学生の語学力の向上が重要な課題となっています。言語教育を担う全カリでは、2013年度から全学部生を対象に、TOEIC IP による英語力伸長度測定テストを年2回、4月と12月に実施しています。さらに、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」事業の採択により、2014年12月の実施分から、これまで有料で実施していた2年生以上対象の英語力伸長度測定テストが無料で受験できるようになりました。

入学時に必修科目のクラスレベルを決める英語プレイズメントテストも、2013年度から TOEIC IP を用いており、伸長度測定テストを受験することによって大学入学以降の英語学習の成果を自分で測れるようになっていきます。

さらに、原則として2年生以上を対象とする英語自由科目の副専攻カリキュラムには4レベル（インディペンデント・コース、インテンシブ・コース、アドバンスト・コース、オナーズ・コース）が用意されており、各コースを履修する基準点として、やはり伸長度測定テストのスコアを活用できます。大学としては、継続学習の励みに同テストを受験し、スコアに応じてより上位の副専攻コースに進むことを学生にすすめています。

このスコアは英語科目の履修資格としてだけでなく、対外的な英語力のアピール材料としても効果的です。TOEIC IP は学校などが主催して行う TOEIC テストのため、公式認定証は発行されませんが、スコアの有効性は公開テストと同等です。ですから、民間企業向けのエントリーシートや履歴書にもスコアを明記できます\*。国内で TOEIC を運営する（一財）国際ビジネスコミュニケーション協会の報告書『上場企業における英語活用実態調査』（2013）によると、調査対象企業の75%が業務に英語を使用しており、同じく約7割が採用時に TOEIC スコアを参考にしているとのこと。

このように、TOEIC IP による伸長度測定テストは、様々な活用できます。さらに、留学を志向する学生は IELTS や TOEFL などのテストに挑戦してみることも良いでしょう。今後、英語によるコミュニケーション能力はますます重要になるだけに、多くの学生が同テストを積極的に受験し、英語学習へのモチベーションをさらに高めることを期待しています。

\* 教員採用試験における1次試験免除など、TOEIC スコアが要件化されている場合は公式認定証が必要なケースもあります。

## 言語 B 各種検定試験の活用と言語 B 副専攻

本学では、言語 B の各種検定試験も行われています。現在、本学を準会場とする実用フランス語技能検定試験、中国語検定試験、「ハングル」能力検定試験の実施にあたっては、各言語教育研究室が広報、受験手続代行、試験監督を担い、また言語によっては受験料を若干割安になるよう工夫し、広く学生の語学学習の促進に役立てる努力をしています。

言語 B は、入学後に一から学ぶ学生がほとんどです。検定試験は、1年間必修科目を学び、どれだけの力がついたのか、自分の力を試す良い機会となるでしょう。全カリでは、必修修了後の継続学習として言語 B 自由科目（言語副専攻科目）が用意されています。言語 B 副専攻は基礎科目群（中級レベル）、コア科目群（上級レベル）を段階的に学ぶ構造になっていますが、下表の等級・スコアを取得することで、基礎科目群をスキップしてコア科目群の学習に進むことができます。

客観的な語学能力証明書となる外部検定試験の等級・スコア取得は留学への大きな足がかりにもなります。留学の選択肢を広げ、世界で活躍していくために、英語に限らず、言語 B の検定試験も活用し、新しい自分を発見してください。

### 【言語 B の主な検定試験】

言語 B	検定試験名	全カリ副専攻スキップ	派遣留学語学選考免除	学内準会場試験
ドイツ語	ドイツ語技能検定試験	3級以上	3級以上	
	ゲーテ・インスティトゥートの検定試験	ZD または B1以上	ZD または B1以上	
フランス語	実用フランス語技能検定試験	準2級以上	準2級以上	有
	DELF / DALF	A2以上	A2以上	
	TCF	350点以上	350点以上	
スペイン語	スペイン語技能検定試験	3級以上	3級以上	
	DELE	A2以上	B1以上	
中国語	中国語検定試験	3級以上	4級以上	有（受験料割引有）
	漢語水平考試（HSK） ※中国国家漢語水平考試委員会 実施	4級210点以上 5級6級180点以上	4級180点以上	
	漢語水平考試（HSK） ※北京語言大学漢語水平考試中心 実施	入門級優秀以上		
朝鮮語	「ハングル」能力検定試験	3級以上	4級以上	有（受験料割引有）
	韓国語能力試験	3級以上	2級以上	

※各基準は2015年度より適用。学内準会場試験の有無は2014年度現在。フランス語圏の派遣留学は、派遣先によってさらに高い等級・スコアが必要となる場合がある。派遣留学についての詳細は国際センターで配布する「2016 海外留学の手引き」を参照のこと。

## 2014 年度 全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

\* 2015年2月現在。3月に開催されるものについては全て予定です。

### <言語教育科目構想・運営チーム>

#### ①英語教育研究室

- ・ 4月3日(木)英語eラーニングオリエンテーション  
(池) 8号館8501教室 9:30~11:30
- ・ 4月3日(木)新任教員オリエンテーション  
(池) 8号館8201教室 10:45~11:45
- ・ 4月3日(木)春学期FDセミナー  
(池) 8号館8201教室 13:30~15:30
- ・ 4月3日(木)ディスカッションクラスオリエンテーション  
(池) 8号館8201教室 16:30~17:30
- ・ 12月6日(土)秋学期FDセミナー  
(池) 10号館X301教室 13:30~15:30
- ・ 12月20日(土)第15回大柴杯スピーチコンテスト  
(池) 5号館5121教室 13:30~16:00
- ・ 12月22日(月)~1月22日(木)  
秋学期英語カリキュラムアンケート実施  
実施数:約5,000枚
- ・ 英語力伸長度測定テスト (TOEIC IP) 実施  
1年次対象:春学期(プレイスメントテスト) 4月  
1日(火)、秋学期 12月6日(土)  
2~4年次対象:春学期 4月12日(土)  
秋学期 12月13日(土)

#### ②ドイツ語教育研究室

- ・ 7月23日(水)春学期担当者連絡会  
(池) 16号館第2会議室 16:30~18:00
- ・ 2月16日(月)秋学期担当者連絡会  
(池) 11号館A101教室 16:30~18:00

#### ③フランス語教育研究室

- ・ 7月8日(火)春学期担当者連絡会  
(池) 12号館第3・4会議室 17:00~18:30
- ・ 12月13日(土)秋学期担当者連絡会  
(池) 10号館X101・X102教室 15:30~17:45

#### ④スペイン語教育研究室

- ・ 6月2日(月)春学期ワークショップ  
(池) 6号館6301教室 18:30~20:30
- ・ 7月22日(火)春学期担当者連絡会  
(池) マキムホール第1・2会議室 18:30~21:00
- ・ 12月4日(木)秋学期ワークショップ  
(新) 8号館N842教室 12:15~13:15
- ・ 2月3日(火)秋学期担当者連絡会  
(池) マキムホール第1・2会議室 18:30~21:00

#### ⑤中国語教育研究室

- ・ 6月7日(土)春学期担当者連絡会  
(池) 16号館第1会議室 16:00~18:30
- ・ 12月13日(土)秋学期担当者連絡会  
(池) 16号館第1会議室 15:00~17:30

#### ⑥諸言語教育研究室

- ・ 7月25日(金)春学期担当者連絡会(朝鮮語)  
(池) ロイドホール第3会議室 17:00~19:30
- ・ 1月29日(木)秋学期担当者連絡会(朝鮮語)  
(池) 13号館会議室 18:00~20:00

### <総合教育科目構想・運営チーム>

- ・ 4月8日(火)スポーツ実習科目担当者連絡会  
(池) ポール・ラッシュ・アスレティックセンター  
4階 12:30~16:00 \*普通救命講習実施
- ・ 7月18日(金)2014年度第2回担当者連絡会  
(池) 8号館8202教室 17:00~18:30
- ・ 2月27日(金)2015年度第1回担当者連絡会  
(池) 8号館8202教室 17:30~19:30

### <新任教員対象オリエンテーション>

- ・ 4月8日(火)  
人事課主催オリエンテーション  
「全カリについて」:佐々木一也全カリ部長
- ・ 3月31日(火)  
ランゲージセンター主催オリエンテーション(新任  
教育講師対象)  
佐々木一也全カリ部長、新野守広言語チームリー  
ダー

### <授業評価アンケート関連>

#### ①言語教育科目構想・運営チーム

##### 【2014年度「授業評価アンケート」関連】

- ・ 全カリ言語教育科目「授業評価アンケート」実施  
(2014年度秋学期科目対象)  
12月22日(月)~1月22日(木)  
実施科目数:245科目

##### 【「授業評価アンケート報告書」関連】

- ・ 全カリ言語教育科目「授業評価アンケート2013年度  
報告書」作成(2014年12月刊行)



②総合教育科目構想・運営チーム

- 【2013年度「学生による授業評価アンケート」関連】
- ・2013年度「学生による授業評価アンケート」学部等総評の作成
- 【2014年度「学生による授業評価アンケート」関連】
- ・2014年度「学生による授業評価アンケート実施」実施科目数：春学期147科目、秋学期148科目、計295科目

<シンポジウム>

テーマ：「全カリにおける学習成果の把握と質保証について」

日 時：2014年11月12日（水）18：30～20：30

池袋キャンパス 太刀川記念館多目的ホール

プログラム：

- ◆発題 佐々木一也氏（全カリ部長・文学部教授）
- ◆基調講演 高橋 哲也氏（大阪府立大学学長補佐・高等教育推進機構副機構長）
- ◆事例報告 原田 久氏（財務・教学運営担当副総長・法学部教授）
- ◆コメンテーター 寺崎 昌男氏（立教学院本部調査役）
- ◆司会 新野 守広氏（言語チームリーダー・異文化コミュニケーション学部教授）

\*本シンポジウム筆録は「大学教育研究フォーラム」第20号（2015年3月発行予定）に掲載



<学外対応>

- ・9月12日（金）大阪市立大学文学研究科 来学
- ・12月5日（金）金沢大学外国語教育研究センター 来学
- ・9月27日（土）横浜市立大学 第31回関東地区大学教育研究会 シンポジウム 報告  
「立教大学全カリ『学びの精神』科目のコンセプト～その設計プロセスから初年次教育を考える～」  
（佐々木一也全カリ部長）
- ・11月29日（土）神奈川工科大学 大学教育学会2014年度課題研究集会 シンポジウム 報告  
「現代日本に必要な『教養』教育の要素」（佐々木一也全カリ部長）

<学会・シンポジウム参加>

- ・5月30日（土）・6月1日（日）  
大学教育学会第36回大会参加  
テーマ「研究と実践の往還から創出する知識」  
林英明・飯塚琴乃（全カリ事務局）  
\*学会参加についての報告は、本誌 No.36に掲載
- ・11月29日（土）・30日（日）  
大学教育学会2014年度課題研究集会参加  
テーマ「日本社会における大学教育の意義」  
京角紀子・小島緑（全カリ事務局）

全カリニュースレター No.37

印刷 2015.2.24

発行 2015.3.5

発行人 佐々木一也

編集人 飯島みどり、中島 俊克

発行所 立教大学 全学共通カリキュラム運営センター

印刷 株式会社 白峰社

全カリ刊行物のバックナンバーについて

全学共通カリキュラム運営センターで定期発行している「ニュースレター」、「大学教育研究フォーラム」は、以下の全カリ web サイトで公開しています。

・「ニュースレター」:

<http://www.rikkyo.ac.jp/academics/undergraduate/zenkari/publication/newsletter/>

・「大学教育研究フォーラム」:

<http://www.rikkyo.ac.jp/academics/undergraduate/zenkari/publication/forum/>

また、図書館が提供する学術リポジトリ（立教 Roots）からも、既刊の全文検索が可能です。

・立教 Roots : <http://library.rikkyo.ac.jp/roots/>